ひまわり訪問看護ステーション

症　例　概　要　利用者氏名：70歳代　男性　要支援1）

利用期間　：R6 年 10月　～現在も利用中

経　　過　令和2年に心原性脳塞栓症と診断され石巻日赤に入院。リハビリのため健育会病院に転院。

その後は自宅で過ごしていた。

外食や買い物に行っていたが令和6年に入り、トイレが近い事もあり外に行きたがらなくなった。

入浴もご本人が自分で行っていたが妻が手伝う事が

出来ず、臀部掻き傷が悪化し褥瘡になり、足の白癬も悪化したため皮膚科を受診する運びとなった。

皮膚科医の勧めもあり訪問看護介入となった。

内　　容

爪は肥厚や変形し、伸びて足の指にも食い込み病院で爪切りを断られ困っていました。

脳塞栓症を発症後、力が入らなくなり、自分で爪を切れず、妻に頼めず伸びたままでした。

妻はひどくなった爪を切れず、やすりで削る事しかできませんでした。

1か月後、ご本人から「妻には内緒だったけど、爪が伸びて、靴が履けなくなってサンダルを履いていた。本当は気に入っている革靴を履きたい」と、秘めていた思いを話してくれました。外出機会も減り、通院以外は自宅で過ごすようになっていました。

足浴と爪切りを始め、肥厚や変形部分は電動やすりで整えました。久々の爪切りで痛みもありましたが、足浴でリラックスし、血流も良くなり痛みは減っていきました。

ケアを継続し2か月後、爪は短くなり、見違えるくらいに形も整いました。冬で外に出られませんでしたが、玄関で靴箱からお気に入りの革靴を出して履いていました。妻は「病院では断られたのに、こんなにきれいにしてもらえて、靴も履けるようになって、嬉しい。ひまわりさんに入ってもらって良かった」と喜び、安堵していました。

5か月後、春めいてきた頃、ご本人から「革靴を履いて散歩してきたよ」ととても明るく嬉しそうな表情で話してくれました。初めの頃とは、見違える程明るくなっていました。妻は「お気に入りの靴があるとは知らなかった。あんなに嬉しそうな表情は何年ぶりかな」と妻もとても嬉しそうでした。

今ではお気に入りの革靴を履いて、妻と一緒に近所のパン屋まで散歩とデートすることが楽しみで日課となっています。

病気になって、おしゃれや妻とのデートも諦め、ひきこもりがちになっていましたが、爪もきれいになるにつれ、少しずつ明るくなり、お気に入りの靴を履きたいという思いを叶えた姿を共有して、私達もとても嬉しかったです。

この経験は、介護の現場における小さな気づきや対応が、どれほど大きな影響を与えるかを改めて教えてくれました。